博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　宮　崎　恒　二　㊞

学位申請者

久志本裕子

論　文　名

「変容するイスラームの学びの文化
ーマレーシア・ムスリム社会に関する文化人類学的考察」

博士論文審査及び最終試験の結果の概要

本論文は、今日、学校教育の中に自明のごとく組み込まれているイスラーム学習が、どのような過程を経て今日の形になったのか、その過程でどのようなことが生じたのかを明らかにすることを目的としている。イスラーム圏に関する広範な先行研究を概観し、長期間の現地調査と関係者への聞き取りにもとづき、本論文は、近代学校教育が導入される以前のマレーシア・ムスリム社会におけるイスラーム学習が、教育という概念とは異なる広がりをもつ複合的な環境によって行われていたことを明らかにするとともに、近代教育制度へ組み込まれる過程において、その学び自体が変容したこと、さらにその変容に当事者が新たな動きを見せていることを明らかにしている。

審査委員会は本論文が博士の学位にふさわしいものであり、審査に際して行われた最終試験において、同様に博士の学位にふさわしい成績を収めたことを認め、博士（学術）の学位を授与することが適当であると判断する。

なお、審査委員の構成は以下の通りである：宮崎恒二（文化人類学、インドネシア・マレーシア研究）、黒木英充（中東地域研究、東アラブ近代史）、飯塚正人（イスラーム学、中東地域研究）、左右田直規（東南アジア近現代史、マレーシア研究）、服部美奈（名古屋大学：比較教育学、インドネシア研究）。

論文の概要

本論文の目的は、マレーシアの事例に則して、イスラームの学びが、ムスリム社会の近代化と近代学校制度の拡大に伴い、どのように変化してきたか、そして当事者たちがその変化にどのように向き合ってきたのか、明らかにすることである。すでに学校教育の中にイスラームに関する教育が組み込まれている現代にあっては、学校教育の場でイスラームを学ぶことが自明のことと捉えられている。本論文は、このような理解に疑義を呈し、近代的な意味に限定されやすい「教育」ではなく、教育に関わる

より広い領域を包含しうる「学び」という概念の使用を提唱、近代学校教育が導入される以前の学びが現代とはかなり異なる様相を示していたこと、イスラームを学ぶことが近代的な学校制度導入の過程で変容し、それに対する様々な反応が生まれており、変化が一方向にのみ向かっているのではないことを示そうとするものである。

本論文の構成は以下の通りである。

第一部　「変容の出発点」

第１章「伝統的イスラームの学びの文化－構成要素と学びの意味－」では、まず、近代以前のイスラーム学習の場であるポンドック（寄宿塾）における学習を構成する①学習の場、②教師、③学習者、④共同体、⑤学習内容の５要素が抽出され、農村部において寄進された土地に、経済的にも知識伝授においても自律的な教師（トッグル）の下で、老若男女が入り交じる環境で、教師を精神的な父と見なし、服装・態度等の独自性を維持する共同体を構成し、眼光紙背に徹するイスラームの古典の読解を行うポンドックのモデルが描かれる。

第二部　近代的学校制度の普及と学びの文化の変容の始まり

第２章「近代学校教育の登場とイスラームの学びに対する認識の変容－雑誌『プンガソ(*Pengasuh*)』の分析から」においては、20 世紀初頭、マレー半島の各地で、近代的な学校の形式を取り入れたイスラーム学校が、ポンドックに代わり設立され始めた状況の中で、1918 年、クランタン州において創刊された雑誌『プンガソ』の分析から、この時代におけるイスラーム指導者の認識、すなわち、近代的な学校の形態への転換が、イスラーム学習を促進しこそすれ、その性質を変えることはない、という認識を持っていたことが明らかにされる。

第３章「アズハル留学の主流化と宗教学校の近代化」では、このような認識の背景に、エジプトにおけるアズハル機構の近代化があることが指摘され、自律的な教師に代わり、教授を分担する教師が、年齢別に分けられた学習者を教育し、古典学習に代わり、試験制度とカリキュラムに沿った学習への変化がイスラームの学びを構成する要素となっていたと論じられる。

第三部　1970 年代以降のイスラーム復興と学びの文化の変容

第４章「イスラーム復興運動における新たな学びの文化」は、1970 年代に活発化したイスラーム復興運動（ダアワ運動）の担い手が、近代学校制度の下でのイスラーム教育を前提として、学校教育をいかにイスラーム化するかという視点からの運動を進めたことが、マレーシア最大のダアワ団体である「マレーシア青年イスラーム運動」(ABIM)の事例から明らかにされる。

続く**第5章「「イスラーム化」政策と国家の「イスラーム教育」の生成」**では、上記のダアワ運動がイスラームを重視する教育政策に一部反映されることとなったが、国家が全面的に関わった国民学校における教科「イスラーム教育」の教科書と授業内容を検討することにより、イスラームの学習が、世俗的な成功や国家の発展につながるとする有用性の観点から理解され、近代学校制度のイスラーム化を目指したダアワ運動が、むしろイスラームの学びの変化をもたらしたとの洞察が示されている。

第6章「宗教中等学校における学びの文化の変容と持続：伝統的学びの要素とウラマーの育成」は、伝統的なポンドックから近代的な学校へ転換した事例から、近代的な教育機関としての機能が充実した反面、伝統的な学習の諸要素を維持してはいるものの、古典に関する学習や、教師の意味が失われていることが指摘されている。

第四部　変容を問う視点

第7章「現代における伝統的イスラームの学びの文化：保持と再生の試み」では、伝統的な学びの場所を現代のクアラルンプールで維持・復興しようとしている事例に焦点を当て、数少なくなったポンドックに代わり、その機能の一部を果たす場がイスラームの学びに不可欠な要素として認識されていることが示される。

第8章「近代的学校制度への非参加という選択：ノン・フォーマルな『マドラサ』における学びの意味」では、さらに、試験に代表される学校教育制度ではムスリム共同体を生成できないと考え、公的教育制度の外側での活動を通じて補う動きを取り上げ、**第9章「『実感(kesadaran)』と『感覚(perasaan)』－制度的教育では学べないもの」**では感性を重視するセミナーの例などを挙げている。

最後の**「結論」**では、イスラームの学びの文化が、近代の学校制度の諸要素を取り入れることにより、近代の学校に近づく過程で、学びの意味が変化してきたこと、そして、学びの意味の変容から生まれる違和感や不足感が、近代化の過程で失われた要素を取り戻す動きの源泉となっている、という見解が導き出されている。そして、マレーシアのムスリム社会において観察された、近代的な学校教育の普及がローカルな学びの文化を変化させる一方で、それとは異なる方向への変化を生み出すという視点が、他の多くの社会についても有効であろうとの見通しが示される。

審査の概要

論文審査における主な質疑は以下の通りである。

(1)　イスラームの学びの文化を論じる文脈

先行研究への言及が主として中東・北アフリカ地域であるため、汎イスラーム的文脈で論じるという印象を受ける。インドネシアなどと比較すれば、イスラーム学習が

学校制度に組み込まれたこと自体、特殊な事例ではないか。マレーシアという文脈に限定するのであれば、国家主導のイスラーム政策の結果であり、多様な学びの文化を国家が排除した結果ではないか。その場合、問題は「国家」と「イスラーム（宗教）」との関係であって、「近代的学校教育」の普及がもたらした帰結とは必ずしもいえないのではないか。イスラームの問題としてではなく、国家と宗教の関係としての議論となるのではないかという問いが発せられた。

これに対して、あくまで対象はマレーシア・ムスリム社会であり、マレーシア独自の文脈における変化を捉えようとした研究であるが、マレーシアに関する先行研究はほとんどないこと、「イスラームの学び」についても、あくまで当事者が認識するイスラームを基軸としていること、マレーシアにおいては国家と宗教が強く結びついており、近代教育制度の導入と学校制度の下でのイスラーム教育が不可分のものと認識されていたことなどに関する応答があった。

(2)　「伝統的」教育と近代的教育

伝統的なイスラーム寄宿塾（ポンドック）における学習を構成する要素として、学習の場、教師、学習者、共同体、学習内容の五つの項目が挙げられているが、その根拠は何か、また、この場合の「伝統」はイスラームなのかマレーなのか、「生徒」の多様性はポンドックの大きな特徴といえるが、どのように解釈できるのかという問いが発せられた。さらに、比較の対象として、先住民社会における学びを参考とすべきではないか、との指摘があった。

これに対し、五つの項目は、近代的な教育との対比において、伝統的なポンドック像を示すために、設定したものであり、あくまでモデルに過ぎない。何をもって伝統とするか、当事者の認識に沿う形で、マレーとイスラームの客観的な相違についての議論は避けた。また現代のポンドックに、高齢の単身女性が増加している傾向は、近代教育が切り捨ててきた対象と教えを、ポンドックが補完的に提供していることに起因すると思われる、との説明があった。また、近代教育制度導入以前、ポンドックがどのような状況であったか、資料がほとんどないため、時系列に沿った変化をたどることは非常に困難であった、との説明も加えられた。さらに、先住民社会における教育と比較し、イスラームの場合は、文字の習得、読書といった近代教育との親和性が強い、という見解が示された。

(3)　新たな学びの形

8章、9章は、ともに新しい知見の提供で大変興味深いが、都市部を中心とした啓発セミナーを、新たな潮流の一つに位置づけることには違和感がある。また、新たな学びが、学校制度下でのイスラーム学習に対立するのか、あるいはそれを補完するの

か、問題設定の段階では、対立を強く打ち出しているが、事例の記述の部分では、かなりトーンダウンし、補完的な位置づけになっているとの指摘があった。

これに対しては、近代教育の導入により、「失われた」と認識しているものを取り戻そうという動きがあり、かつ、閉塞感の解決がイスラームに向かうという例として挙げたこと、また、対立か補完かという点については、近代学校制度を完全に放棄するのではないが、学校制度の下では、かつてのようにカリスマ性を帯びた教師（ウラマ）が重要性を失い、イスラームの学びができないということを考え始めている現実を指摘した、との応答があった。

(4) 社会全体の変化との関連

主題をイスラームの学びに限定しているが、教育制度のみならず、官僚制の導入など広範な社会的な変化と関連しているのではないか、マレーシア社会の中で、他宗教を切り離し、イスラームを主流化する中で教育を近代化するという動きが最初にあったのではないか、また、人々の抱く喪失感は、イスラームの学びの変化のみで説明できるのか、イスラームに不可欠な要素が失われているのであれば、それはもはやイスラームではないし、イスラームを学校制度の下で行っている国・地域では、イスラームは存在しないという結論になるのではないか、などの問いが発せられた。

これらの問いに対し、議論がイスラームの中で完結するかのような印象を与えたとすれば、表現について反省の余地があるが、あくまでマレーシア人ムスリムの認識やとらえ方にもとづく議論である。産業構造が変化し、学位が求められるようになったのは確かだが、まず、教育全体に関する変化について触れる必要があった。より大きな文脈での議論は今後の課題としたい、との応答があった。

(5) 今後の研究の方向性に関する示唆

論文の中では議論されていないが、今後の研究の方向性に関する示唆として、より大きなグローバリゼーションの問題としてとらえ、一方的な変化ではなく、相互作用を伴う一般的な文化接触の議論として展開できるのではないか、知識の偏重に対するタサウフの出現やサラフの時代を理想とする現状批判など、イスラーム内部におけるダイナミズムや変化に対する対応という観点もありうるのではないか、などの示唆が審査委員から示された。

評価

審査の対象となった論文が、極めて優れたものであることについては、審査員が全員一致するところであった。

まず、東南アジアのみならず中東地域のイスラーム教育について論じた先行研究を

幅広く批判的に吸収し、地域研究が陥りがちな、特定の地域のみを論じて他の地域との比較の視点を持たない研究ではなく、他地域との比較を可能にする考察がなされていること、長期間のフィールドワークに基づき、調査対象社会の肉声を含め、丁寧に記述されていることが評価された。概念設定についても、学習を「機関」として固定的に捉えるのでなく、イスラームの学びという概念によって柔軟に捉える視点も斬新である。

イスラーム圏全体を視野に、ミクロからマクロへ広がる可能性を意識しつつ、議論を展開していること、また、比較の対象として興味深いインドネシアを次なる対象として見据えていることなど、今後の研究の方向性を意識している点が評価された。さらに、質疑応答に際して、指摘された問題点を十分に意識しつつ次の段階での研究の発展の方向性を見定めている点も、研究者として高く評価された。

結論

久志本氏がこれまで着実に積み重ねてきた研究業績は、文化人類学、地域研究、比較教育学のいずれの分野においても高く評価されるものである。複数の専門分野の教育を受け、専門の文献を渉猟しつつ、長期間の現地調査を行ってきた候補者ならではの研究成果といえよう。

審査委員会は全員一致で博士（学術）の授与にふさわしい論文であり、かつ最終試験の成績を示したとする結論に達した。